

文書館所蔵資料にみる戦時下の暮らし

専門研究員 山本 明史

1. 本日の内容

- ・令和7年度は「戦後80年」の節目の年です。
- ・今回の歴史講座では、すべての国力が動員されることとなった戦時下の暮らしの中でも、とりわけ国民生活に大きな影響を与えた「物資の欠乏」について、当館所蔵の関連資料から振り返ってみます。
- ・取り上げるテーマは以下の4つです（「アーカイブズガイド—学校教育編—」より）。

- ①金属製品の供出
- ②木炭自動車
- ③陶貨
- ④山野草の活用

※「アーカイブズガイド—学校教育編—」は当館ウェブサイトで公開しています。
(掲載 URL : <https://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/education/archives-guide/>)

2. 物資の欠乏

①金属製品の供出

5-3-3 戦時下の人々

金属製品の供出

*土山家文書575「家庭の鉄と銅を御国のために役立てましょう」

解説

戦争末期、金属の不足を補うために家庭から金属製品が供出されました。

写真は、山口県並びに財団法人戦時物資活用協会から出された、鉄や銅など家庭の金属製品の供出を呼びかけたチラシです。「家庭の鉄と銅を御国の為に役立てませう」「いざ金属は御国へ!!」「鉄と銅 今ぞ出す時、活す時」などの言葉が並んでいます。

表では、供出する金属製品の具体的な例として、積極的に供出するものと、なるべく供出するものに分けて書かれています。戦争が進むにつれ、これらの金属製品が日常生活から消えていきました。

供出された金属は公道価格で買い取られ、市町村役場を通じて代金が支払われました。また、取り外しに費用がかかるものや代替物が必要なものについても、別途申し込みれば手配を受けることができました。

*「金属回収物件受領控書」(内田家文書(防府市)413)、「金属回収物件受領書」(同414)は各戸から供出された金属の重量の集計表です。

目次に戻る

②木炭自動車

5-3-3 戦時下の人々

木炭自動車



* 県庁戦後B1940年代310「瓦斯発生炉要図」

解説

戦時色が強くなると軍需優先の統制経済のため国民生活が圧迫されました。そのため、金属製品が陶製や木製で代用されたり、衣料品ではスフ（人造絹）が登場するなどしました。

不足するガソリンや軽油の代わりに、木炭から発生させたガスを燃料としたのが木炭自動車です。写真は木炭バスで、従来の車体を改造し、車体後部に大きな木炭ガス発生装置が積み込まれていました。

木炭自動車は、ガスを発生させる準備のため出発までに時間がかかり、また、燃焼力が弱くスピードも遅いものでしたが、民間での石油使用を抑えるため、その使用が奨励されました。

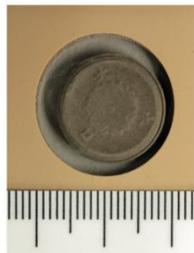
戦後、統制経済が終了すると、急速に姿を消しました。

* 「漁船用木炭瓦斯発生装置二関スル件」（県庁戦前A農業735）や「漁船用木炭瓦斯発生装置経過一件」（県庁戦前A農業740）などの資料は、自動車ばかりでなく漁船の動力源としても木炭が使われたことを示しています。

③陶貨

5-3-3 戦時下の人々

物資の欠乏（陶貨）



* 藤田家資料「陶貨造幣計画一件」

解説

太平洋戦争末期となると、生活必需品をはじめとする物資が極度に不足しました。とりわけ金属の不足が顕著で、寺院の鐘、銅像、刀剣類などが供出されました。当時、金属製の貨幣の代用として計画されたのが陶貨です。写真左はその一件綴りで、陶貨の製造に至るまでの過程や委員会の協議内容、試作の様子、工場の施設概要等が記してあります。

これによると、非金属貨幣の研究は、アルミニウムおよび錫の供給が逼迫してきた1944（昭和19）年1月ごろから造幣局で進められました。様々な材質の研究が行われた結果、粘土および長石を主材とする陶貨が最良であるとされ、さらに（1）原料の土および石が多量に産出すること、（2）適正な焼成のための石炭の消費が少ないこと、（3）陶貨の色が均一に得られる技術を有すること、（4）着色材が豊富に手に入ること、などの諸条件から、京都・瀬戸・有田の民間業者に委託して製造することになりました。京都工場では1銭陶貨および10銭陶貨300万枚、瀬戸工場では1銭陶貨および5銭陶貨200万枚、有田工場では1銭陶貨100万枚の日産目標がたてられました。

しかし、終戦によりこの陶貨は世に出ることはありませんでした。

* 戦争末期の耐乏生活に関する資料として「衣料切符」（一般郷土史料1094）、「衣料切符制早わかり」（吉田家文書（上関町）追加12）などがあります。

④山野草の活用

5-3-3 戦時下の人々

山野草の活用

| 品名 | 水分 | 蛋白質 | 脂肪 | 可溶性無機物 | 繊維 | 炭素含水 | 灰分 | 百分中 |
|------------|------|-----|-----|--------|-----|------|-----|-----|
| 新ワラビ湯煮品 | 九五 | 一一 | 〇・二 | 五・〇 | 〇・四 | 二・五 | 〇・三 | 六 |
| 開葉ワラビ(花)湯煮 | 九三 | 一一 | 〇・五 | 四・八 | 〇・六 | 二・五 | 〇・二 | 七 |
| 鹽漬ワラビ鹽出後 | 九四 | 一一 | 〇・一 | 四・八 | 〇・七 | 二・五 | 〇・二 | 七 |
| 干ワラビ(湯煮)岩手 | 一五・五 | 二・六 | 三・五 | 四・八 | 九・一 | 三・四 | 五・六 | 一六 |
| 同 福島 | 二二 | 一・八 | 一・六 | 五・四 | 一・九 | 四・三 | 五・七 | 二六 |
| 同 青森 | 一三・八 | 三・六 | 二・四 | 四・二 | 一・九 | 四・三 | 四・五 | 二九 |
| 同 秋山 | 九・五 | 二・九 | 二・二 | 五・五 | 九・五 | 四・八 | 四・五 | 二九 |

ワラビ製品の成分を表示すれば次の如くである。(一〇〇分中)

*行政資料 40各団31
「山野未利用資源の食糧化」

*県立山口図書館所蔵「防長林業第102号」(昭和15年9月発行)の中に「集めよ団栗(ドングリ)!!」の記事があります。小学生に、アルコールやタンニンなどを抽出する原料として、また家畜飼料としてドングリを集めるように呼びかけています。

解説

戦争が長期化する中、軍需品の生産が優先される一方で食料をはじめとする生活必需品の生産はとどこおり、十分な量の配給が行われませんでした。写真は、戦争最末期の1945(昭和20)年5月に山口県戦時食料協会が発行した冊子で、食料不足を補うために、食用可能な山野草の活用を呼びかけています。

「山野草を巧く利用し食糧化すれば、全国で米1千万石相当の増産と同様の効果がある」とし、利用可能な山野草として、フキ、ワラビ、ゼンマイ、ヨモギ、タンポポ、ヨメナ、アザミ、ヨブスマサウ、モミヂカサ(シドケ)、タビラコ(ホトケノザ)、ノゲン、ギシギシ、スイバ、イタドリ、アカザ、シロザ、ヒユ、アオビユ、スベリヒユ、クワンザウ(ヤブクワンザウ、オニクワンザウ、クワンザウナ、ヤブニンニク)、ギバウシ類、ノビルなどをあげ、それぞれの栄養価や調理方法を紹介しています。

例えば、タンポポについては「春の軟らかいものは勿論のこと、夏秋の二番芽、三番芽とも茹でて、おひたし・和え物・煮物等として風味が宜しい」としています。

目次に

3. 「戦時下の暮らし」に関する、「アーカイブズガイド」のその他のトピック

- ◎戦時体制の強化 [戦時体制強化のために山口県が発行したポスター]
- ◎強まる戦時体制 (衣料切符)
- ◎戦時色の深まり (大日本国民体操)
- ◎空襲 (家庭防空)